

エッセイ、回顧録

アラビスト外交官の39年（第11回）

塩尻 宏

（中東調査会参与、元駐リビア日本国大使）

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

第11回 イラン・イラク戦争激化 砂漠の救出作戦

《ヨルダン：激変する中東世界》

1973年10月の第4次中東戦争後から数ヶ月するとキッシンジャー米国務長官による中東和平仲介工作（シャトル外交）が始まりました。その結果、1977年11月のサダト大統領のイスラエル訪問、1978年9月のキャンプ・デービッド合意を経て、1979年3月にはエジプト・イスラエル平和条約が締結されました。アラブ・イスラエル紛争から離脱したエジプトは、直ちにアラブ連盟から除名（加盟資格停止：1989.5復帰）されてアラブ世界の盟主の地位を失うことになります。

このような情勢の中で、1979年7月、病身であったバクル大統領の後を受けて名実共にイラクの最高権力者となったサッダーム・フセイン大統領は、アラブ世界から総スカンを受けたサダト大統領に代わってアラブ世界の指導者を自認するようになりました。その後、中東のみならず世界全体がフセイン大統領の挑発的な言動よって翻弄されることとなります。

イランでは1978年1月から反政府デモが頻発するようになり、同年末にはパハレビー皇帝は国内情勢を統制する力を失い、1979年1月にエジプトに亡命しました。入れ違いに亡命先のパリから反体制運動を指導していたホメイニ師が1979年2月に帰国し、同年4月にiran・イスラーム共和国が樹立されました。フセイン大統領が率いるイラクは、政権交代後の未だ不安定なイランの国内情勢を突いて1980年9月、同国に対する全面戦争に突入しました。

西にパレスチナ問題を抱えるヨルダンは、東にイラク、北にシリアとそれぞれ国境を接しています。第2次世界大戦後の新たな世界秩序が形成されようとする時期に、英国とフランスの霸権調整の結果としてヨルダンが誕生しました。その舵取りを担うフセイン国王は、激変する中東情勢の中で自国の存立を賭けて必死の外交努力を続けていました。私がヨルダンに赴任した1978年7月は、中東世界にそのような緊張感が漲っていた時期でした。

《ヨルダン：我が国要人の中東訪問》

その頃の日本では、1973年の第4次中東戦争に伴う石油危機によるパニックから国を揺るがすほどの深刻な影響を被った経験から、石油の安定供給を確保するためにはアラブ産油諸国との関係強化が肝要であるとの認識が高まっていました。以前に触れました1973年12月の三木武夫総理特使（副総理・環境庁長官）の中東訪問以降、1980年代にかけて外相、通産相などの主要閣僚や総理特使、野党（民

社党）の調査団、財界人の使節団など、日本から極めて多くの要人がアラブ産油諸国を中心の中東を訪問しました。

我が国総理としては初めての福田赳氏総理の中東諸国（イラン、カタル、アラブ首長国連邦、サウジアラビア）訪問（1978.9）、わが国皇族として初めて皇太子殿下ご夫妻（現天皇・皇后両陛下）のヨルダンご訪問（1976.6）及びサウジアラビアご訪問（1981.2）が行われたのもこの頃です。また、私のヨルダン在勤中の1980年には、三笠宮崇仁殿下ご夫妻の同国ご訪問がありました。在ヨルダン大使館の総括兼政務担当としてご到着からご出発までの日程が滞りなく取り進められるよう緊張して奮闘したことを覚えています。

この時期には日本から多くの閣僚レベル要人の中東訪問が行なわれましたが、そのうち、前尾繁三郎衆議院議長（1974.1）、園田直外相（1978.1）、福田総理（1978.9）、江崎真澄通産相（1979.7）などの中東訪問に東京（外務省）の指示で私は通訳要員として応援出張しました。福田総理の中東訪問では、最初の訪問国であったイランではパハレビー国王と福田総理との首脳会談も行われましたが、その4カ月後にはパハレビー政権が崩壊しました。私は総理訪問に同行されていた園田外相の通訳を担当しましたが、アラブ首長国連邦のアブダビでのスウェイディ外務担当相との会談では先方がイラン情勢について強い関心を示し、様々な質問があったことを記憶しています。

《ヨルダン：知遇を得たイラク要人の処刑》

ヨルダンに着任して1年後の1979年7月上旬、江崎通産相のイラク訪問に通訳としてバグダードに出張しました。イラク側ではハムダーニ（Adnan Hussein al-Hamdani）企画相が接遇を担当し、当時からイラクの最高実力者であったサッダーム・フセイン革命評議会副議長との会談も彼の手配で実現しました。フセイン副議長の信

頼も厚いとされていたハムダーニ企画相は、私と同年代（30歳代後半）と見られる好青年で誠実な人柄と見受けられました。江崎大臣のイラク滞在中の全ての公式行事に同行した同企画相と通訳の私は、日程の合間に打ち解けた雰囲気で私的な話を交わしていました。彼なりのイラクの将来像をも描いていたようで、「バグダードの主要道路に並木を植えたいと考えている。ユーカリが過酷な気候にも耐えると聞いているが、どう思うか。」と尋ねられたことは未だに印象に残っています。

バグダードでの江崎通産相とイラク要人との通訳業務を終えてアンマンに戻り、在ヨルダン大使館の館務に復帰してほどなく、イラクでクーデター計画が発覚(1979.7.29)したとの報道がありました。その関係者の中にハムダーニ副首相（前企画相）の名前を発見して信じられない思いがしました。

私がバグダードに出張した直後のイラクでは、病身のバクル (Ahmad Hasan el-Bakr) 大統領が 1979 年 7 月 16 日に退陣し、フセイン革命評議会副議長が大統領に就任しました。名実ともに最高権力者となったフセイン大統領は、自らの政権基盤を固めるために疑わしいと思しき側近の肅清に乗り出したようで、クーデター計画への関与を疑われた関係者は 10 日後の 8 月 8 日に処刑されました。つい数週間前に親しく言葉を交わし、何度も握手し、抱擁して別れたハムダーニ氏が不本意な死を遂げたことにいたたまれない思いがしました。前にも書きましたように、その前年にはアデン在勤中に言葉を交わしたことがあるルバイア・アリ南イエメン大統領がやはり権力抗争に敗れて処刑されています。ご縁のあった要人が次々と消されて行くのを目の当たりにして、改めてアラブ政治の厳しさを感じました。

《ヨルダン：イラン・イラク戦争と邦人避難》

在ヨルダン在勤中は、時折閣僚の中東訪問の通訳に呼び出されました。基本的には、めまぐるしく展開する周辺諸国の動向を眺めながら、ヨルダン情勢の先行きに思いを巡らせつつ日常業務の処理に当たっていましたが、1980年9月にはイラン・イラク戦争が始まりました。当時のイラクには、石油・ガス関連を中心に多くのプロジェクトに日本企業が参画しており、一時的な出張者も含めると約5千人の邦人が滞在していました。開戦と同時に、イラク国内に居た在留邦人は一斉に退避を始めました。最終的には、イラク南部に居た約3,500人の邦人はクウェート経由、1,500人ほどがヨルダンやトルコ経由で退避しました。大使を含めて日本人は5名ほどの小規模な在ヨルダン大使館が、イラクから退避してくる約1,000人の邦人に対応することになりました。

1980年9月21日に始まったイラン・イラク戦争は、緒戦ではイラク側の優勢が伝えられましたが、9月23日には首都バグダードや南部の主要都市バスラなどがイラン空軍機による爆撃を受けました。翌24日には東京（外務省）から、百人余りの邦人が陸路ヨルダンに向かっているので、ヨルダンへの入国を支援するようにとの指示を受けました。直ちに在ヨルダン大使館からヨルダン外務省に対して文書（口上書）をもって、イラクから退避して来る日本人についてはビザなしでの入国を許可するよう要請すると同時に、私からも旧知のシャンムート外務次官（Amer Shammout）に連絡して、国境事務所に対して上記の措置を大至急指示するよう依頼しました。シャンムート次官は、1974年に初代駐日大使として昭和天皇に信任状を奉呈した際に私が通訳を務めて以来の縁で、ヨルダンで再会してから日本に対して何かと好意的であったのは幸いでした。

今でもそうだと思いますが、当時からイラクでは外国人が出国する場合には予め出国ビザを取得することが義務付けられていました。緊急避難する邦人の殆どは出国ビザを取得する時間的余裕がないことは明らかでしたので、イラク側の出国手続きに支障が起きること

が懸念されました。そこで、私が国境での邦人受入れのため現地に赴くこととなり、9月25日の早朝に大使館の現地職員が運転する館用車でアンマンを出発しました。

陸路イラクからヨルダンに抜けるには、バグダードから砂漠地帯を経由してアンマンに繋がる道路しかありません。現在でもイラクとヨルダンを結ぶ唯一最重要の物流ルートとなっていますが、その道路は、第2次世界大戦以前にイラクの石油利権を独占していた英國資本のイラク石油会社（Iraq Petroleum Co.）がキルクーク油田からの石油を地中海岸（ハイファ）に運ぶために敷設したパイプラインに沿って造られています。アンマンからバグダードまでは約1,000キロですが、ヨルダン・イラク国境はアンマンから約500キロのH4と呼ばれるパイplineのPumping Stationの付近にあります。さらに150キロほどバグダード方向に進むとルトバ（Rutba）というオアシス都市があり、そこにイラク側の出入国管理事務所があります。

アンマンを出発してから7時間近くかけて、9月25日の午後にH4のイラク国境にあるヨルダン側の国境事務所に到着しました。砂漠地帯に入ると片道2車線の道路が東に向けてまっすぐに伸びており、舗装状態は良好でした。途中の数か所は道幅が倍ほどに広げられていましたが、同行の運転手によれば、緊急時に軍用機が離発着するためとのことでした。ヨルダン側の国境事務所では、責任者と思われる将校に事情を説明すると、アンマンから既に連絡があったと見えて“Welcome, welcome. No problem”と応答し、極めて好意的な対応でした。

そこから1キロほど進んでイラク側の国境事務所を越え、更に2時間ほど進むとルトバにあるイラクの出入国管理事務所に到着しました。そこには、多くの他の外国人と共に数十人の邦人（70名ほどだったと思います）が事務所の窓口付近で待機していました。彼らに事情を尋ねると、バグダードから大型バスをチャーターして取る

ものも取り敢えず脱出してきたとのことでした。付近にたむろする人数を見ると、窓口経由の手続きでは時間がかかると思われました。そこで私は、彼らの旅券を取り纏めて事務所の責任者に面談し、アラビア語で事情を説明して特別の取り計らいを要請しました。先方も緊急事態であることは認識していたようで、出国ビザの有無を確認することなく全ての旅券に出国スタンプを押印してくれました。急いで彼らのところに戻り、バグダードから乗ってきたバスでヨルダンに向けて出発しました。2時間ほど走って日暮れ頃にイラク側の国境事務所に到着しましたが、ルトバを出発してから邦人の一人が旅券を持たずに脱出してきたことが判明しました。

そこでは、イラクの係官が一人一人の旅券を見て出国スタンプが押されているか否かを確認し、出国スタンプがない旅券の持ち主は150キロ離れたルトバに戻って手続きするよう要求されました。事務所の手前にはヨーロッパ系と思われる白人を含む多くの外国人が疲れ果てた様子で道端に座り込んでいました。昼間の直射日光は強く陽が沈むと気温が下がる砂漠道路の途中で、食べ物や飲み物もなく立ち往生している様子に心が痛みました。彼らは数台の車に分乗して今朝早くバグダードを出発してようやくこの国境事務所まで着いたが、全員ルトバに戻るよう要求されているとのことでした。アラビア語が出来ないため事情が分からぬまま出国スタンプを取らないで来てしまったようでした。

私が同行している邦人の旅券には全て出国スタンプが押されていますが、そもそも旅券を持っていない人についてどう対処するのかが問題でした。一人ひとり顔写真と照合されるようなことがあれば面倒なことになると懸念されました。そこで、ルトバでしたのと同じように私が全員の旅券をまとめて持ち、イラクの係官に在ヨルダン日本国大使館の外交官であると名乗った上で、「あのバスに乗っている日本人全員の旅券です。よろしくお願ひしたい」と旨申し入れました。無愛想でしたが特に不親切というわけではないその係官

は、全ての旅券の出国スタンプを確認し、バスのところにやって来て入口から車内を見渡してからOKと言って旅券の束を返してくれました。今思っても冷や汗ものでした。

その間、幼児を子連れた婦人をも含むフランス人らしきグループから片言の英語で「どうか助けてほしい」と懇願されたので尋ねてみると、「手続きの不備で全員ルトバに戻れと言われて途方に暮れている」とのことだ。憔悴した一行がこれから夜道を走ってルトバに戻るのは容易ではなく、不測の事態も懸念されました。私からイラク人の係官にアラビア語で事情を説明して好意的な配慮を要請したところ、代表者一人が彼らの旅券を取りまとめてルトバに戻り手続きをしてくることになりました。その時のことを思い出すと今でも胸が痛み、もう少しできることがあったのではないかと忸怩たる思いがしますが、同行している数十人の邦人をとにかく無事に脱出させることが至上命題であったその時の私としては、彼らにそれ以上の支援の手を差し伸べる余裕はありませんでした。

1キロほど先のヨルダン側の国境事務所に到着すると、事務所内のサロンにはアラブ風のサラダとパンにお茶が用意されおり、休んでいるうちに入国手続きが終わるなど極めて親切に迎えられたことを覚えています。そこで一息ついてから深夜の砂漠道路を7時間ほど走って、9月26日の未明に全員無事にアンマンにたどり着きました。ところが、9月28日付の読売新聞に「何してる！日本大使館」「戦火の国境 106人立ち往生」との大見出しで、英、米の大使館では手回し良く対応して、それぞれの技術者たちは問題なく出国しているとして、日本大使館の対応の不行き届



きを非難する記事が出ました。9月27日にルトバ発でその記事を送稿した記者は、私たちと入れ違いにアンマンから陸路イラクに入つたようで、途中のルトバで新たに到着した邦人たちが立ち往生しているのを見て「何してる！日本大使館」との思いに駆られたのでしょうか。

その記者は、アンマンにある日本大使館に接触することなくルトバに直行したようで、1日前に私がルトバに居たことは知らなかつたようでした。彼の記事を受けて、アンマンに戻ったばかりの私に、外務省幹部から直接電話で「邦人の有無にかかわらず、とにかく直ちにもう一度ルトバに行くように」との依頼がありました。私としては、退避してきた邦人の方々に取り敢えずの宿舎を確保すると共に最終的に日本に無事帰国できる目途を立てる必要もあるため、一方的な報道に対応するためだけに片道10時間近くのルトバに再び赴くことは適当でないと考えてアンマンに留まることとしました。

例の記者がルトバで遭遇した邦人の方々はその後無事にアンマンに到着し、彼らを含めてイラクからの外国人避難民が続々とアンマンに到着し始めました。日本企業のアンマン事務所関係者の奮闘によつて邦人避難民はもとより日本企業関係のアジア諸国からの数千人に及ぶ労働者の宿舎や食事手配への対応については、十分とは言えないまでも何とか事なきを得ました。イラクからアンマンに脱出した邦人数は、最終的には千人ほどになったのではないかと思われます。その多くは通常の商業便で隨時近隣諸国や欧州などを経由して帰国しましたが、残りの邦人は10月1日と8日の2回にわたりアンマンに飛來した日本航空の特別機で帰国しました。まさに嵐のような2週間でした。

上記記事の末段に、外務省当局者が「・・・(在イラク)大使館からルトバまで行くのは物理的にむりな事情にあった。そこで在ヨルダン大使館員が国境を越えてイラク側の担当者に邦人の出国を折衝したが、イラク側は『あなたはヨルダンの担当者だからだめだ』と拒否されているのが実情だ。・・・」と釈明したと伝えられていますが、上述のとおり、その内容は事実ではありません。全国紙による大見出し報道は大きな影響を与えます。報道関係者が事実を伝えることは重要ですが、パニック状態にある状況の中でことさら不行き届きの側面だけを伝えて不安感や不満感を煽り立てるような報道振りには未だに疑問を感じています。この件については、後日、朝日新聞の囲み記事で、私がいち早くアンマンから600キロ以上も離れたイラク領内のルトバまで出向いて邦人を連れ出したことが紹介されて、一方的な報道の印象が少し改善されました。



《ヨルダン：皇太子殿下ご夫妻のサウジアラビアご訪問》

私がヨルダン在勤3年目に入った1981年の2月に、我が國皇太子・同妃両殿下（現上皇・上皇后両陛下）のサウジアラビア御訪問がありました。1971年のファイサル国王の訪日に対する答礼を目的とする親善訪問で、日本の皇室として初めてのサウジアラビア御訪問でした。その受け入れを担当する在サウジアラビア日本大使館はさぞかし大変だろうと思われ、近隣公館の一つとして私の居る在ヨルダン大使館にも応援出張の依頼が予想されました。

皇太子・同妃両殿下のサウジアラビア御訪問の2週間ほど前に東京（外務省）から大使あてに、「塩尻をサウジアラビアの首都リヤドにアラビア語通訳として応援派遣願いたい」旨の連絡がありました。大使と相談の上で、行事の重要さと在サウジアラビア大使館の大変さを慮って要請に応じることとし、直ちに出張の準備を始めました。その直後に、再び東京から「皇太子殿下と妃殿下が別日程となり、男性の通訳は妃殿下に同行できないので、塩尻夫人にも出張をお願いしたい」旨の要請がありました。私の妻和子は大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）アラビア語学科卒の同期生ですが、彼女がアラビア語の公式通訳の依頼を受けたのは初めてのことでした。

皇太子・同妃両殿下の御訪問自体は2泊3日だったと思いますが、事務方としては遅くとも到着の前日にはサウジアラビアに入る必要があります。ヨルダンからのフライトの都合などを勘案すると1週間程度留守にすることになります。当時、ヨルダンでは8歳と10歳の息子たちを同伴していました。近くに親族でも住んでいるのであれば何とか対応できるかもしれません、外国で子供たちだけを置いて1週間も両親が不在となるのは困難でした。

そこで、妻の出張は辞退せざるを得ないと考えて上記の事情を東京に説明したところ、東京の応答は「男性通訳の代わりは何とか手当てができるが、女性



通訳は他に見つからない。については、夫人のみに出張をお願いしたい」というものでした。事の重要性を考えて、結局、私がヨルダンに残って息子たちの面倒をみるとこととし、妻だけがリアドに出張して美智子妃殿下（当時）の御通訳を務めることになりました。妻にとっては初めての大役でしたが、得難い貴重な経験であったと思います。

なお、当時のヨルダン社会や美智子妃殿下をお迎えしたサウジアラビアの女性王族の様子などについてご興味のある方は、塩尻和子著『ヨルダン＝野の花の国で』（1993年5月、未来社）の「美智子妃とサウジアラビアの王妃たち」（P.254 - 261）をご参照願います。

（続く）